

琉球諸語の語彙に残る強勢言語の痕跡とその示唆

尹 熙洙(総合研究大学院大学 先端学術院 博士後期課程)

キーワード: 琉球祖語、歴史言語学、強勢言語

琉球祖語に再建される語彙のうち、(1) *uma^{ga} ‘孫’, (2) *weke^{ga} ‘男’, (3) *wekeri ‘男兄弟’, (4) *wena^{go} ‘女’, (5) *wonari ‘女兄弟’は、基礎的な意味を持つにも関わらず、その語源について十分な説明がなされていない。本発表では、これらの語を強勢と位置によって条件づけられる母音交替を持つ日琉系の言語変種(本発表では「借用元方言」と称する)からの借用として説明し、琉球祖語と日本語の間に見られる変則的な子音対応の一部が同じ借用元方言からの借用によるものであることを示す。

本発表で「日本語」は、琉球祖語と概ね同時期と思われる形を引用する。また、現代語形以外の濁音は、前鼻音化を反映する表記に統一する(*g*を^h*g*にする)。

1. 先行研究による語源説

上記の5語の問題の所在は、日本語の^h*go*と対応すると思われる指小接尾辞が(1), (2)では^h*ga*, (4)では^h*go*という2つの形式を持つこと、そして(4)と(5)の第1音節の母音が^h*e*と^h*o*で一致しないことである。

中本(1979: 121–123)は、(2)について論じながら^h*ga*を^h*go*に「愛称辞の*a*」が付いた形として前者の現象を説明した。しかし、「愛称辞の*a*」(発表者の再建では^h*ja*)が付いた語は首里方言で語末母音が長くなるが(例えば^h*ateo:du* ‘商人’に対する^h*ateo:da:*)、(1), (2)は語末母音が短い。また、中本(1979)は(4)の北琉球における反映のうち、第1音節に^h*o*, ^h*u*を持つ例を挙げ、*wona^{go}に再建することによって後者の問題を回避しているが、(4)の^h*e*の反映の^h*o*, ^h*u*は規則的な音変化によって説明できる可能性があり(ローレンス 2019: 100 参照)、逆に^h*o*を再建すると首里方言のように^h*i*を持つ形が説明できなくなるため、琉球祖語には*wena^{go}を再建するのが妥当である。

村山(1981: 164–169)は、(4)と日本語 *wonna^{go}* の類似を指摘し、第2音節の母音^h*a*の影響による部分的な同化で^h*o*が非円唇化して^h*e*になったとしたが、(4)と同様の音韻環境を持つ(5)が説明できない。セリック(2022)は、(1)の^h*ga*を宮古語 *futaga* ‘双子’と同じ音韻対応によるものとしているが、北琉球で^h*ga*(^h*ga*)を持つ形式に対して南琉球で^h*ga*が現れる場合は、北琉球から南琉球への古い借用と考えるべきである。例えば、宮古語 *muri:ani* ‘子守り姉’に含まれている*ani* < ^h*ane* ‘姉’と^h*anga* ‘姉’の^h*an*の不一致は、後者を首里方言^h*ang^{ga}a:*の借用とすることによって説明できる。したがって、(1)は‘双子’と同じ音韻対応ではない。

2. 強勢言語からの借用による説明

(4)と日本語 *wonna^{go}* の対応は偶然とは考えられないが、後者の *wonna* の部分は上代日本語 *womina* に由来する改新的な形であるため、(4)と *wonna^{go}* は共通の祖形に遡るとするより、借用の結果と考えるのが妥当である。借用の際に、何らかの理由によって第1音節の母音が^h*e*として反映された。同様に、(1), (4)の第3音節の母音も、日本語の^h*o*に対応する母音が^h*a*として反映された。

日本語 *o* :: 琉球祖語 ^h*a* の対応は語末に限られ、逆に^h*o* :: ^h*e* は語末以外に限られた分布を示す。(2), (3)の^h*weke*に対応する語は日本語には見られないが、*wonoko* または *wotoko* に対応するもの(*wonna*の影響で2音節にしたもの)とし、(2), (3)の^h*e*も日本語の^h*o*に対応するものと考え、^h*o* :: ^h*e* は一つの語の中で複数回現れることができるということになる。また、^h*o* :: ^h*a* と ^h*o* :: ^h*o* は共起しない。

借用元方言において、語彙強勢を持つ言語体系を想定すると、強勢を持つ^h*o*は語末では^h*a*、非語末では^h*o*として借用され、強勢を持たない^h*o*は語末では^h*o*、非語末では^h*e*として借用されたという規則を見出すことができる。強勢言語においては、強勢音節の強化と非強勢音節の弱화가起こりうるため(Hyman 1975: 208)、例えば[ə]に中舌化した^h*o*が^h*e*として借用されることや、[ɔu]に二重母音化した^h*o*/₁#が^h*a*として借用されることは、十分に想像できる現象といえる(ケベック州フランス語における同様の二重母音化について Dumas 1974 参照; また、^h*a*として借用されることについては、意志を表す語尾^h*-au* < ^h*-amu* や漢語の語末^h*au*の例を参照; 中澤ほか 2020)。強勢の位置は、日本語の低起式に対応する語では語末、高起式に対応する語ではラテン語(Allen 1973)に似た規則による。

3. 借用元方言の強勢以外の特徴

日本語と琉球祖語の間には、*s* :: Ø や *ti*, *tu* :: ^h*si*, ^h*su* の変則的な対応を示す語があり、(6) *sore* :: ^h*ore* ‘それ’, (7) *se^{mba}* :: ^h*e^{mba}* ‘狭い’, (8) *tu^{mba}* :: ^h*su^{mba}* ‘唇’などが挙げられるが、(9) *sukuna-* (< ^h*sokona-*) :: ^h*ekera-* では *s* :: Ø と *o* :: ^h*e* が共起し、(10) *ukon~ukkon* (< ^h*utikōmu*) :: ^h*usikeni* ‘鬱金’では *ti* :: ^h*si* と *o* :: ^h*e* が共起するため、(6), (7), (8)も同じ借用元方言からの借用語であることがわかる。(4), (5)の^h*n*は^h*nn*に対応するため、(9)の^h*n* :: ^h*r*は(4), (5)と矛盾しない。むしろ、^h*n* :: ^h*r*の対応によって、(3), (5)の^h*-ri*を^h*ani* ‘兄’と比較できるようになる。

(8)のように語頭に^h*s*を持つ‘唇’の形は、宮崎県南部及び鹿児島県にも見られるため(五十嵐 2022: 15)、借用元方言はかつて九州で話されていた基層方言であると考えられる。

参考文献:

- Allen, W. Sidney (1973) *Accent and rhythm. Prosodic features of Latin and Greek: A study in theory and reconstruction*. Cambridge: Cambridge University Press.
- セリック ケナン (2022)「上代日本語の甲類の o_1 に対する琉球祖語のもう一つの音対応について」『日本語学会 2022 年度春季大会予稿集』115-120.
- Dumas, Denis (1974) “Durée vocalique et diphtongaison en français québécois”. *Cahier de linguistique* 4: 13-55.
- Hyman, Larry M. (1975) *Phonology: Theory and analysis*. New York: Holt, Rinehart and Winston.
- 五十嵐 陽介 (2022)「琉球語・八丈語以外の非中央語系ジャポニック諸語の系統」言語系統樹ワークショップ, 2022 年 12 月 25 日, 沖縄県立博物館・美術館.
- ウェイン ローレンス (2019)「竹富島方言アクセント (2)」『琉球の方言』43: 97-129.
- 村山 七郎 (1981)『琉球語の秘密』東京: 筑摩書房.
- 中本 正智 (1979)「首里王朝の言語 (2) 人間関係の性・年令・親疎等を基準とする語彙」『琉球の方言』5: 117-151.
- 中澤 光平・セリック ケナン・麻生 玲子「南琉球諸語における漢語の借用時期と音変化の相対年代」『日本言語学会 第 161 回大会 予稿集』78-84.